

【紀要委員会企画】

〔報告〕

専門看護師の看護実践能力向上に向けた 聖隷 CNS 事例検討会の活動について

井上 菜穂美¹⁾ 西尾 里美²⁾ 小野田 弓恵³⁾
水島 史乃⁴⁾ 雲丹亀 美加⁵⁾

- 1) 聖隷クリストファー大学看護学部 2) 愛知県がんセンター中央病院
3) 浜松医療センター 4) 藤枝市立総合病院
5) 聖隷クリストファー大学大学院看護学研究科博士前期課程

Activities of the Case Study Group for Improving the Nursing Practical Skills of Certified Nurse Specialist

Naomi Inoue¹⁾ Satomi Nishio²⁾ Yumie Onoda³⁾
Fumino Mizushima⁴⁾ Mika Unigame⁵⁾

- 1) School of Nursing, Seirei Christopher University 2) Aichi Cancer Center Hospital
3) Hamamatsu Medical Center 4) Fujieda Municipal General Hospital
5) Graduate Program, School of Nursing, Seirei Christopher University

《抄録》

専門看護師（CNS：Certified Nurse Specialist、以下 CNS とする）制度は日本看護協会が1994年から開始した制度である。本学にはがん看護学、老年看護学、慢性看護学、急性看護学、小児看護学領域に CNS 教育課程が設けられ、さらに2019年度には在宅看護学領域にも開設を予定している。本学では大学院修了生に対する支援体制を整備するために、2010年からがん看護学領域の修了生を中心として「聖隷がん看護事例検討会」を立ち上げ、現在は他領域の修了生や CNS を含めた「聖隷 CNS 事例検討会」として活動している。本稿では、事例検討会の活動概要、参加者による事例検討会の評価について報告する。今後の事例検討会の発展に向けて、看護学研究科教員への参加依頼、修了生や在学生への働きかけ、事例提供者および参加者の負担軽減策の検討、修了生と教員との連携強化が必要であると考えられる。

《キーワード》

専門看護師、事例検討会、看護実践能力

I. はじめに

専門看護師制度は、医療の高度化、専門分化が進む中、複雑で解決困難な看護問題を持つ個人、家族および集団に対して水準の高い看護ケアを効率よく提供するため、特定の専門看護分野の知識・技術を深め、保健医療福祉の発展に貢献し、あわせて看護学の向上をはかることを目的として、日本看護協会が1994年から開始した制度である。1996年に初めて6名の専門看護師（CNS：Certified Nurse Specialist、以下CNSとする）が誕生して以来、2018年12月時点でのCNS養成課程は13分野301課程となり（日本看護協会、2018a）、CNSの認定者数はおよそ2300名におよぶ（日本看護協会、2018b）。

聖隷クリストファー大学大学院看護学研究科（以下、本学とする）には、がん看護学、老年看護学、慢性看護学、急性看護学、小児看護学の5領域にCNS教育課程が設けられ、2019年度には新たに在宅看護学領域においてもCNSの養成が始まろうとしている。本学では2010年1月にがん看護学領域の修了生6名が認定試験に合格して以降、毎年のように各領域の修了生からCNSを輩出している。さらに、CNSにはますます複雑化する医療・看護ニーズに対応する役割が求められるようになってきていることから、より高度な実践力を修得するために従来の26単位から38単位制の高度実践看護師教育課程への移行が求められ、本学においても2016年から新たに38単位制に対応したカリキュラムが設けられている。

大学院修了後、修了生はCNS候補生としてそれぞれの所属施設から必要とされる役割を主体的に開発し、獲得していくことが必須となるが、この過程では大学院で専門的知識を学んだとはいえ、多大な困難を生じることが予測される。しかし、本学には修了生の支援体制が整備されていなかったことから、

2010年度地域貢献事業費（当時）の助成を受け、がん看護学領域の修了生および教員を中心として「聖隷がん看護事例検討会」を立ち上げた（森本他、2011）。さらに、がん看護学以外の修了生からも要望が寄せられたことから、2014年からは「聖隷CNS事例検討会」と名称を変え、慢性看護学、急性看護学、小児看護学領域の修了生や在学生のほか、他大学院を修了して近隣施設に勤務するCNS、CNSの活動に関心のある看護師も参加して、事例検討会を開催している。本稿では、約9年間の事例検討会の活動概要と参加者による評価について報告する。

II. 専門看護師（CNS）について

CNSの役割は、①個人、家族および集団に対する卓越した看護実践、②看護者を含むケア提供者に対するコンサルテーション（相談）、③必要なケアが円滑に行われるための保健医療福祉に携わる人々の間のコーディネーション（調整）、④個人、家族および集団の権利を守るための倫理的な問題や葛藤の解決を図る倫理調整、⑤看護者に対するケアを向上させるための教育、⑥専門知識および技術の向上ならびに開発を図るための実践の場における研究活動、とされる（日本看護協会、2014）。CNSの役割は多岐にわたり、その活動範囲は所属施設のみならず周辺地域にもおよぶ。

CNSになるためには、日本看護系大学協議会が定める教育課程において所定の単位（総計26単位または38単位）を取得し、かつ看護師の実務経験が通算5年以上（うち3年間以上は専門看護分野の実務経験）を有するものが、日本看護協会が実施する認定審査（書類審査および筆記試験）に合格し、卓越した看護実践能力を有するとの認定を受ける必要がある（日本看護協会、2014）。さらに、CNSはレベルの保持のために5年ごとの更

新制であり、CNS の認定取得後も継続して自己研鑽に努め、看護実践能力を向上することが求められている。CNS としての役割を発揮するためには、専門領域の知識やスキルのブラッシュアップはもとより、教育や研究への積極的な参画が求められている。

Ⅲ. 聖隷 CNS 事例検討会の概要

1. 事例検討会の発足

本学を修了した CNS 候補生から、定期的に大学に集い事例や課題を持ち寄り検討したいとの要望が寄せられたこと、また CNS 候補生を送り出す教育側からも CNS 候補生に対する支援体制を整備したいとの考えから、2010 年に小島操子教授（当時）、森本悦子准教授（当時）、がん看護学領域の修了生および在生を中心に「聖隷がん看護事例検討会」が発足した。事例検討会の目的は、CNS として役割を果たす中で直面する多くの課題について検討し、それらの解決に向けた方策を明らかにすることによって、CNS が相互に成長を深めることである。

第 1 回聖隷がん看護事例検討会では、会の運営について話し合われたほか、CNS としての役割開発における課題と対策について意見交換が行われた（森本他、2011）。

2. 事例検討会の実施内容

現在、事例検討会は年 4 回（6 月、9 月、12 月、3 月）定期的に大学で開催されている。6 月、9 月、12 月は 2 名の事例提供者による事例について討議する形式であり、多忙な CNS や教員が参加しやすいよう 18 時から 19 時 30 分の時間帯に実施している。3 月の事例検討会は CNS で共有したいトピックスや研修報告会、学習会などを企画し、終了後には新規 CNS 認定合格者や大学院修了生の祝賀会などにより参加者の親睦を深めている。各会の参加者数はばらつきがあるもの

約 15 ～ 20 名であり、がん看護学、慢性看護学、急性看護学、小児看護学領域の CNS および修了生、在生が参加している。事例検討会の司会および事例提供者は、参加者の負担が偏らないよう、事務局担当者を中心に参加者で話し合い、年間計画を決定している。

通常的事例検討会の進行について述べる。2 名の事例提供者は、CNS が介入に至った経緯、事例の背景や看護問題、看護目標、看護計画と評価、討議したい内容などを A4 用紙 2 枚程度に簡潔に整理した資料を事務局担当者にメールで提出する。事務局担当者は、パスワードロックした PDF ファイル（A 事例、B 事例）を参加者に配信する。参加者は配信された 2 事例を読んだうえで検討会に参加する。当日は 2 グループ編成で討議を行うため、司会の進行により希望する事例の検討グループに入り、各グループで討議した後に、両グループ間で討議内容を発表し共有する。その後、事務局担当者からの連絡事項が伝えられ



図 1. 事例検討会 グループ別討議の様子



図 2. 事例検討会 討議内容の共有の様子

ると事例検討会は終了となるが、参加者の多くは近況報告や、所属施設における取り組みなどの情報交換、教員との打ち合わせなど相互に交流を深めている。通常的事例検討会の様子を図1および図2に示す。

これまでの事例検討会で討議された事例内容としては、CNSの6つの役割のうち「実践」、「コンサルテーション（相談）」の順に多く、臨床の場でCNSが経験した困難事例が提示されていた。実践事例では、危機的状態にある患者および家族に対する看護介入、症状マネジメントに難渋する患者および家族に対する看護介入、治療方針や療養の場に関する意思決定支援、外国籍のがん患者への看護介入など、解決が困難で非常に複雑な問題を多分に含み、事例提供者はCNSとしての役割を果たすべく、悩みながらも大学院で学んだ理論やモデルを活用して丁寧にアセスメントし、実践を重ねていた。また、コンサルテーション（相談）事例では、相談内容の裏にある真の問題を明らかにするプロセスや、相談者の力量を見定め相談者の成長を促す支援、患者および家族の安楽な生活のためのチームアプローチなど、事例提供者は自らのCNSとしての立ち位置に迷いながらも、効果的なコンサルテーションになるよう真摯に対応している様相が示されていた。その他、病名告知や療養の場など倫理調整に関する事例、地域連携パスの導入にともなうCNSの役割についての問題提起がなされた。

3月の事例検討会（報告会・勉強会）のテーマを表1に、会の様子を図3、図4に示す。

IV. 参加者による事例検討会の評価

事例検討会には、豊富な経験を有するCNSだけでなく、認定後間もないCNSや、これからCNSを目指す候補生や大学院生も参加している。それぞれの立場によって、事例検討会の評価は異なると考えられる。これ

までの事例検討会の活動を通して得られた学びや検討会の意義、課題について振り返っていく。

1. 事例検討会事務局担当の立場から

私は2009年3月に本学がん看護CNSコースを修了し、同年12月にがん看護CNSの認定を受けた。現在、病棟に所属しており、看護スタッフ、医師、コメディカルからのコンサルテーション、がん看護外来の担当、教育研修企画運営などの役割を担っている。病棟では、看護実践をとおしてCNSが身近で相談しやすく、協働できる存在となるように活動している。

聖隷CNS事例検討会においては、発足当初から参加しており、2017年4月から事務局を担当している。年4回開催される事例検討会のスケジュールや開催内容の連絡、会場設営をはじめ、遠方からでも参加者が出席したいと感じられるような運営を目指している。事務局担当として、事例提供者にはテーマの中にCNSの役割を明確に示すように依頼している。患者の経過や看護実践を報告するだけでなく、CNSとして活動の目標をどこにおいたのか、看護介入による成果や課題は何か、など活動や役割の振り返りを意図している。ディスカッションでは、事例の中からCNS自身が抱える問題や組織での課題が見出されることがある。参加者によっては、所属施設にCNSがひとりの場合もあり、ロールモデルがないままに役割に戸惑いながら勤務している人もいる。同じ分野のCNSからのアドバイスはもちろんのこと、他分野のCNSの異なる視点からの意見は、協働を意識でき、互いの専門性の向上につながると思われる。また、大学院の先生方からスーパーバイズを受ける貴重な機会となるほか、教育と臨床、所属施設間、地域間での情報共有や連携の場となり、CNSの新たな活動を見出せる場にもなっている。

表 1. 3月 事例検討会のテーマ

年度	テーマおよび内容
2010 年度	がん看護専門看護師 コンサルテーションの実際 (近畿大学医学部付属病院 OCNS 小山富美子氏による講義)
2011 年度	「小林がん学術振興財団 第1回がん看護専門看護師海外研修助成事業」 米国がん看護学研修報告 (聖隷三方原病院 OCNS 佐久間由美)
2012 年度	「小林がん学術振興財団 第2回がん看護専門看護師海外研修助成事業」 米国がん看護学研修報告 (千葉県がんセンター OCNS 山田みつぎ)
2013 年度	「小林がん学術振興財団 第3回がん看護専門看護師海外研修助成事業」 米国がん看護学研修報告 (静岡県がんセンター OCNS 津村 明美)
2014 年度	「小林がん学術振興財団 第4回がん看護専門看護師海外研修助成事業」 米国がん看護学研修報告 (藤枝市立総合病院 OCNS 水島 史乃・静岡県立総合病院 OCNS 鈴木かおり)
2015 年度	「小林がん学術振興財団 第5回がん看護専門看護師海外研修助成事業」 米国がん看護学研修報告 (桑名市総合医療センター OCNS 岩田 友子)
2016 年度	1) 「小林がん学術振興財団 第6回がん看護専門看護師海外研修助成事業」 米国がん看護学研修報告 (山梨県立大学看護学部 OCNS 前澤美代子) 2) ミニレクチャー「皮膚障害の看護ケア」(藤枝市立総合病院 OCNS 水島 史乃)
2017 年度	第3期がん対策推進基本計画の策定ー専門看護師は何ができるかー 1) がん対策推進基本計画の概要 (聖隷クリストファー大学 井上菜穂美) 2) プレゼンテーション ①緩和ケア (聖隷三方原病院 OCNS 佐久間由美) ②相談支援・情報提供 (聖隷三方原病院 OCNS 大木 純子) ③就労支援 (浜松医療センター OCNS 小野田弓恵) 3) テーマ別ディスカッション

OCNS : Oncology Certified Nurse Specialist がん看護専門看護師



図 3. 事例検討会 テーマ別ディスカッション
(3月) 終了後集合写真



図 4. 事例検討会 新規CNS認定合格者の祝賀会

事例検討会の事務局の役割はコーディネーション（調整）の成果となっていると感じている。たとえば、事例提供の候補者がおらずテーマが決まらなると、かつては半ば強引に指名して決める傾向にあったが、CNS皆さんの検討会であることを念頭におき、前向きな投げかけをして意見が出るのを待ち、事例提供者や参加者の立場にたって会をまとめる配慮ができたと考える。

事例検討会の課題としては、自主的に事例を提供するCNSが一部に限られており、運営の工夫が必要になっていることである。多忙で参加が困難な場合や事例を提供して参加者から意見を得ることに消極的になっている傾向が要因として推測される。CNSが自分たちで作上げた事例検討会であると意識して参加し、事例をまとめて様々な見解を得ることがCNSの役割開発となり、自己の能力向上の一助となると捉えられるよう運営に努めたいと考える。（がん看護CNS 西尾里美）

2. 発足以来の参加者の立場から

私は2009年3月に本学がん看護CNSコースを修了後、同年12月にがん看護CNSの認定を受け、CNSとして9年目を迎える。院内では、がん患者の病状理解や受け止めを確認しながら、治療方針や終末期の療養場所の意思決定において最大限に意思が尊重されるよう活動している。

CNSの資格を取得した当時は、組織の中で役割を開発する上で焦りを感じていた。また、問題を多く抱えた事例のコンサルテーションを受け、複雑な問題を分析する上で自分の判断がこれで良いのか迷うことが多かった。その頃、本事例検討会が発足され、大学の先生方や参加者から事例への介入方法について助言を頂くことができた。CNSとして、問題の明確化がいかに重要であるかを改めて認識し、看護実践を通して組織における自分自身の立場について考える機会となった。そ

の後も、定期的に自分の悩んだ事例について検討する機会を得て、大学院で学んだ様々な理論を活用しながら専門看護師の役割を振り返っている。他の参加者の事例も含め、事例検討会では客観的に事実を把握しながら、問題の焦点を見定め、スムーズな問題解決を目指したCNSとしての実践のあり方について学習する機会となり、自身の成長につながっていると感じている。

現在、年4回開催される事例検討会にはできる限り参加している。自分の能力不足を痛感することもあるが、先生方から指導を頂く機会は貴重な学びの場である。また参加者の看護実践、考え方に多くの刺激を受け、率直な意見交換や情報交換により自分の視野が広がっている。事例検討会は看護実践力の向上だけでなく自分自身の士気を高める上で重要な機会となっており、今後も定期的な開催ができるよう仲間と共に活動していきたいと考えている。（がん看護CNS 小野田弓恵）

3. 博士後期課程在学生の立場から

私は2012年にがん看護CNSを取得し、2018年からがん診療支援センターの所属となり、これまでの緩和ケアチーム専従看護師の業務よりも幅のあるがん看護分野の業務に携わるようになった。緩和ケア専従または専任の医師、専任の薬剤師や管理栄養士、そして、臨床心理士、歯科衛生士、社会福祉士、作業療法士・理学療法士・言語聴覚士などの多くの医療者とともに、がん患者およびその家族の支援をすることに変わりはないが、外来・入院診療部門や相談部門などでの活動が増えており、また、実践よりも調整や倫理調整の役割の比重が増していると感じている。一方で、2016年から大学院博士後期課程に在籍している。進学した理由は、施設内での研究支援や教育に携わりながら自分自身を研鑽したいと思ったこと、また、CNSとして看護実践を重ねていく中で取り組みたいテー

マに出会い、CNS コース時代の恩師に背中を押していただいたことにより、現在に至っている。業務と学業の両立はとても欲張りで、先生方や職場の方や家族など周囲の支援無くしてはできないことでもある。恵まれた環境に感謝しながら、この先も CNS としてブラッシュアップを続けていきたいと考えている。

聖隷 CNS 事例検討会では、事例の振り返りによって共感したり、新しい発見をしたりと、毎回多くの学びを得ている。参加している CNS の背景は様々であり、その CNS ならではの看護の展開を聞く機会となり、またディスカッションの中で別の CNS の見解を聞く機会でもある。事例提供時の準備や検討会出席のための業務調整は容易ではないが、それ以上にとっても貴重な機会であり、この検討会を大事なものととらえている。

ケアの受け手が変化するとともに、ケアを提供する自分たち看護集団も変化している中で、事例検討会の企画運営を振り返ると様々な検討を重ねてきたと感じている。継続することの難しさもあるが、がん看護に限らずすべての看護分野において、また認定資格や専門資格のない看護師であったころから、事例検討の重要性を痛感してきた。今後は、参加する CNS のメンバーとともに検討会の企画運営に貢献したいと思っている。

(がん看護 CNS 水島史乃)

4. CNS を目指す大学院生の立場から

私が CNS 事例検討会に参加したのは、大学院入学後に指導教授から紹介を受けたことがきっかけだった。大学院の先輩が参加されていたこともあり、一緒に事例検討会に参加するようになった。事例検討会では、ディスカッションの場に参加することで、モデルとなる CNS の先輩方の看護実践を通して、CNS が現場で役割をどのように果たしているのか、特にコンサルテーションや教育など大学院の講義で学んだ理論的基盤と実践とを

リンクさせて考えることができ、自分自身の理解を深める場となった。

1年目は、検討会に参加し先輩方の発表を聞き質問することが精いっぱいだったが、2年目になり自分自身が実践実習で担当した事例についてプレゼンテーションする機会を頂いた。事例を提供するにあたり一番苦戦したことは、事例の概要を共有していた臨床指導者や指導教授ではない参加者の方々に何をどのように書けば伝わる事例になるのかということだった。教授の指導を受けながら何度も何度も事例を振り返ることによって、自分自身の実践を客観的に見ることができたように感じている。事例検討会では、提示した事例に対して CNS の先輩方や大学の先生方から多くの質問や助言を受けることができた。先輩方から投げかけられる質問によって、実習中の現場で患者や家族の状態から何を考え、どのようにケアをしたのか、改めて自分自身の思考過程をたどる作業ができたと思う。事例を客観的に見た先輩方からの意見や助言は、自分になかった気づき、新たな視点の発見でもあった。自分自身の考えや思考を記述し伝えることが苦手な自分にとっては、とても貴重な経験だったと感謝している。

事例検討会に参加したことで、CNS の実際の経験から多くの学びを得ただけではなく、領域を超えた CNS の方々が大切にしている考えや看護観に触れることができ、自身の看護観を問い直す機会になり、自分を成長させる機会をいただいたと思う。この検討会での学びを大学院修了後の実践に役立てていきたいと思っている。

(大学院生 [急性看護学領域] 雲丹亀美加)

V. 今後の事例検討会のあり方について

事例検討会に参加している当事者の評価ならびに発足当時から事例検討会に携わってい

る教員の立場から、現在の状況をふまえて今後の事例検討会のあり方を考えていきたい。

事例検討会の意義について、臼井ら (2011) は「専門看護師としての思考過程を丁寧にたどり、事例分析や直接ケアを行うことで、複雑で困難な問題を抱える患者に対する卓越した実践のトレーニングを行うことができる」と述べている。参加者による評価でも述べられていたように、事例提供者として自身が経験した事例を整理することは、俯瞰的な視点で自身の看護実践を振り返ることを意味する。さらに、CNS として同じ立場の参加者同士で意見交換を行なうことは、互いに新たな気づきを得る機会となり、CNS としての役割を再確認しながら今後の看護援助について考察を深めることにつながる。また、参加者は2事例のグループ討議を通して、それぞれの立場に置き換えて考察することで、自身の看護活動を振り返る機会となる。これらのプロセスを繰り返すことによって、CNS が相互に学びを深め、卓越した看護実践のトレーニングとなり、成長につながるものと考えられる。さらに、異なる領域の事例を検討することで視野が広がり、多くの学びが得られるとの意見も聞かれている。現在はがん看護学領域の教員が中心となって運営しているが、専門的な助言を得られるよう大学院で CNS 教育を担当している他領域の教員にも参加を依頼すること、さまざまな領域の CNS や修了生、在学生が参加できるよう広報活動を含めた働きかけが必要であると考えられる。

事例検討会により成長の機会を得られる一方で、参加者は年4回の検討会に参加するために所属施設での業務調整を要し、特に事例提供者は準備のために大幅な時間的制約を余儀なくされる。また、CNS 自身が経験した複雑な事例を提示することは、討議を通して自身の課題や至らなさを痛感することにつながり、参加者にとって過度な負担にもなり得る。最近事例提供者の決定に時間を要する

ことが増えており、参加者が主体的に事例提供者に立候補できるよう、事例のフォーマット作成や開催時期や回数の検討などのハードルを下げる工夫や、事例を提供することによる成長機会を得るといった意図をアピールすることも必要であると考えられる。

CNS の役割獲得について、田中 (2015) は役割獲得の感覚を得るまでに約3年、その後の経験と努力を積み重ねて6～10年をかけて自分なりの確固とした CNS の役割を獲得していたことを明らかにしている。CNS が誕生して20年以上が経過し、毎年新規認定者は増加しているものの、CNS を雇用する施設は限られており、ロールモデルの獲得は大きな課題であるとされている (田中、2015)。所属施設にロールモデルとなる先輩 CNS がいない場合であっても、事例検討会は同じような課題や悩みを抱えて成長してきた CNS と交流することができる貴重な機会であり、心理的支援を得る場でもあると考えられる。また、大学院修了生が CNS または候補生として定期的に集うことによって大学 (教員) との関係性も維持できることから、CNS の役割のひとつである「実践における研究活動」について相談し指導を受ける機会にもなる。大学としても、CNS の成長を支援するだけでなく、多くの CNS と会することで円滑な情報交換ができるとともに、臨床看護研究の実施など連携強化を図ることができ、大学院教育の充実にもつながることから、互いの利益は大きいと考えられる。以上のように、CNS 認定後の自己研鑽を積み重ねるためにも、継続的に事例検討会に参加できるような対策を検討する必要がある。

CNS の思考と実践の基盤には、CNS のゆるぎない知識や専門分野への高いモチベーションがあり、自身の行為や状況の変化を振り返るリフレクション・プロセスによって強化される、と言われている (井部、大生、2015)。CNS が役割を果たしていく中で

直面するさまざまな課題や苦悩について、思考過程を整理することで、CNS としての看護実践能力の向上につながる。自身の看護実践を客観的に振り返るリフレクションやディスカッションの機会、CNS との交流機会を提供し CNS の成長を支援することは、CNS 教育課程を有する大学院として非常に重要であると考え。今後は CNS および修了生と、教員との連携をさらに強化し、事例検討会を発展させていきたいと考えている。

最後に、聖隷 CNS 事例検討会の開催および運営にご協力頂いているメンバーおよび事務局担当の皆様、聖隷クリストファー大学教職員の皆様に深く感謝申し上げます。

文献リスト

井部俊子，大生定義監修，専門看護師の臨床推論研修会編集（2015）：専門看護師の思考と実践，医学書院，pp170-176.

森本悦子，井上菜穂美，小島操子他（2011）：聖隷がん看護事例検討会の発足と活動ーがん看護専門看護師としての役割開発に向けてー，せいれい看護学会誌，2（1），11-14.

日本看護協会，専門看護師教育課程一覧（2018年4月），参照2019年1月5日，<http://nintei.nurse.or.jp/nursing/wp-content/uploads/2018/03/cns-kateitiran-sankou20180330.pdf>

日本看護協会，都道府県別専門看護師登録者一覧（2018年12月），参照2019年1月5日，http://nintei.nurse.or.jp/nursing/wp-content/uploads/2019/01/CNS_map-201812.pdf

日本看護協会，公益社団法人日本看護協会専門看護師規定（2014年），参照2019年1月5日，<http://nintei.nurse.or.jp/nursing/wp-content/uploads/2014/06/cnskitei210406.pdf>

田中久美子（2015）：日本の専門看護師が役割を獲得するまでの内面的成長プロセス，

日本看護研究学会雑誌，38（1），127-137.
白井いづみ，中村伸枝，松田直正他（2011）：専門看護師・専門看護師教育課程修了者および看護管理者の専門看護師教育課程へのニーズ，千葉看護学会会誌，17（1），35-42.